高齢ドライバーの「慣れの罠」と現実的な事故防止・免許返納アプローチ

89歳日常ドライバーの行動観察と意識調査からのインサイト

Context

【背景】地方における自動車は「不可欠なライフライン」。免許保有率上昇に伴い高齢者事故が社会問題化。

【対象】89歳（買い物・病院利用のためほぼ毎日運転）

The Gap

客観的現実（ドラレコ観察）

- 事実1: 一時不停止（歩行者の未確認・そのまま通過）
- 事実2: 大幅な速度超過（50km/h制限道路を60〜70km/hで走行）

▶診断：明確な「ヒヤリハット」と高い事故リスクが存在

主観的認識（アンケート回答）

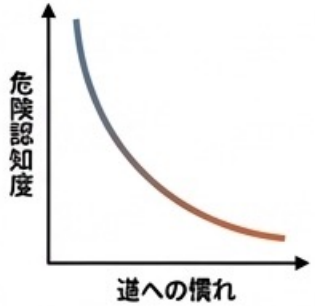
Q. 危険を感じるか？
A.「全くない。慣れているから大丈夫」

Q. 遠出（市外）はする？
A.「慣れない道は怖いから公共交通機関を使う」

Q. 免許返納は？
A.「生活が不自由になるから難しい」

▶診断：本人の危険認識は「ゼロ」

概念：慣れの罠 (The Familiarity Trap)



能力低下以上に「慣れによる油断」が事故のトリガー。未知の道への警戒心はあるが、日常の道への危険認識は完全に麻痺している状態。

解決策へのアプローチ

アプローチ1: 認識のアップデート（認知面）

自身の運転データ（ドラレコのヒヤリハット映像）を可視化・フィードバックし、「慣れ＝安全ではない」という客観的事実を直視させる仕組み作り。

アプローチ2: 「返納のメリット」の創出（制度面）

公共交通の整備だけでは車を手放す理由にならない。自治体による「毎月の生活必需品の支給」など、生活を維持・向上させる直接的なメリット（特典）を提示し、返納ハードルを下げる。

NotebookLM